

「動詞。身
、という意
リングを脱ぐ
「する」と
のか、ないの
つ」をどう使
か辞書を引か
得している二
分からない。
観光客、留
日本にお金を
を増やさねば
日本語を使っ
必要です」

カタカナと表
音は母音が五
著など同音異
せしみに「な
ことが多用
一にも使われ
葉遊びは日常
シンプルなの
です。日本語
言葉と辞書の
ものになる

は、日本語学
なる、と。

いんです。僕
研究していま
何を言えば笑
という研究で
実践していま
様々なことに
われているの
い人も知らせ
しをしたいん
るのもその一

「可能表現
」の誤用
んは「1字少
」なので、ら
る主流になる
言葉も辞書も
いを辞書で堪
(秋山惣一郎)

短い中

噛まない子どもたち



藤木 辰哉

歯科医師 (愛知県)

ガムを動かしながら噛んだり、奥歯で噛むべきところを前歯で噛んだりするなど、普通に噛めない人が少なくない。

また、おにぎりを食べてもらうと、1個のおにぎりを30秒弱で食べ終える子もいれば、5分以上かかっても食べきれず、苦しうにのみ込んでいる子もいる。

「食べる機能」に問題を抱えた中学生にとって、学校で昼食を短時間で食べることを強いられるのは大きな苦痛に違いない。中学校は、食べるのが遅い生徒のことも考えて、余裕をもった昼食時間を設定すべきである。

とはいえ、昼食時間を長くすると、早く食べ終わった生徒たちがふざけだして困る、という現場の考え方もあるだろう。

そこで、昼食時間には、一口最低30回噛んでからのみ込むよう、すべての生徒に指導してはどうだろうか。こうすることで、食べる機能の向上を期待できるうえ、食べるのが遅い生徒たちの負担も減るはずだ。

さらに、昼食時間を健康教育の一環とするのもよいだろう。昼食を食べながら「食」についての話を聞いたり、議論したりする。要は、昼食時間を単なる栄養補給の時間としなくて、教育機関として充実した時間にしていくことが大切だと考える。

食べることは、生きるために不可欠な営みであるとともに、人生の大きな楽しみでもある。現在の中学校の短すぎる昼食時間では、食を食べることを楽しいと感じられるはずもなく、生きるための必須事項としての役割を果たしているのかさえ疑問である。

義務教育の中学校の昼食時間を長くして、有効利用すれば、「食べることは楽しい」と感じる人たちが増えるだろう。そうした気持ちだが、生活の質の向上、ひいては生きる力を育むことにつながっていくと思われる。

私の視点

ニュースを読み解くウェブサイト

<http://webronza.asahi.com/>

WEBRONZAから

ウェブロンザ

たり、自分探したり、自己探求することはよくあり、ちが急に就活に変わったわけでは、会社は自分に現しようとするきわめて標準的を可能にしたの列など、会社がむ日本型雇用シス
そうしたシスと、仕事に自己にリスキーなにしを重ねてしまからです。
いま「あの会定している」とは一部の一流大大学生には、ど料が上がる見込そうに見える。いから、できるめて公務員志向の仕事が自分のい込むことによせようとする学もともとサーていた学生も、